

広報

かみす

2026年
1/1・15
No.450

Kamisu public relations

特集

神栖デイスカバリー

File
31

職人の手仕事とまちのヒストリー

籐を編む

手にしているのは、市内の職人が丁寧に編み上げた籐製バッグ。籐製品の魅力とともに、漁業のまちの歴史との、深いつながりを紹介します。(写真：手子后神社)

Pick up

市長・議長から新年のごあいさつ…………… P2～3
スマホでラクラク確定申告…………… P8
将来市内で活躍してくれる医師や看護師をサポート…………… P14



市公式
LINEは
コチラ



広報かみすが動き出す

【COCOAR】アプリをダウンロードし表紙にスマートフォンをかざしてください。詳しくは12ページ



[COCOAR]





神栖デイスカバリ

File
31

特集

籐を編む

職人の手仕事とまちのヒストリー

昔から暮らしの中で活用されてきた籐製品。神栖市には、茨城県伝統工芸品に指定された名品を作り続けている工房があります。今回は、洗練された工芸品としての籐製品の魅力とともに、漁業のまちの歴史との深いつながりなど、籐の世界に迫ります。



波崎漁港



美しい編み目が特徴

港町の内職としての籐表編み^{とうおもてあ}

天然素材の籐で編んだいす、籠、枕、敷物など、皆さんの身の回りに籐製品はありますか？ 実は神栖市の歴史をさかのぼると、籐製品と深い関わりがあることが分かります。明治時代の波崎では、漁業を営む人たちが内職として、草履や下駄に籐を編み込む籐表編みをおこない、次第に村の特産物となり、大正期には専門の籐表工場が軒を連ねるほどでした。

その波崎地域で長年にわたり籐製品を作り続けているラタンファニチャー堀江の2代目・堀江正壽^{まさとし}さんに、まず籐の歴史を聞きました。



職人が丁寧に編み上げる

「親父から聞いた話では、漁網の編み方に似ているから手馴れたもので、波崎で籐表編みが内職として広まったらしいですね。日本では、戦後にGHQからいすを作るよう求められたけれど、焼け野原で材料がない。そこで、滑走路を作るために東南アジアのジャングルで伐採された籐を輸入し、籐いすを作り始めたそうです」

父の作品が東宮御所に

父の故・正則さんが籐職人の修行を始めたのは、まさにその時代だといえます。

「親父は4歳で終戦を迎え、9歳から東京の親戚(籐屋)の仕事を手伝って、中学生の頃にはいっぱしの職人になっていました。20歳前後の頃には、三越百貨店からの依頼で東宮御所に納める浩宮さま(現天皇陛下)の乳母車を作ったことがあるそうです。それから、籐むしろという敷物を編み、東宮御所に出向いて仕上げの縁かがりをした時には、皇太子ご夫妻(現上皇ご夫妻)から話しかけられたと、よく聞かせてくれました。他にも、当時の親方の発案で、籐の端材を使って鼓の形に似た^{つづみ}鼓

いす^{いす}を作ったらしいんですね。それから何十年も経ってテレビで東京スカイツリーの建設現場を見た時、^{いす}鼓の構造と同じだな。力を分散する骨組みだよ」と話していたこともあります」

東京都

伝統工芸

士にも認定された

名工・正則さんの思い出話から、宝物のような逸話が次々と飛び出しました。



鼓いす

籐に囲まれて育ち、父に学ぶ

正壽さんは、どのような思いで父の跡を継いだのでしょうか。

「親父は9歳からですけど、私は生まれた時から籐がある環境で育ってきました。仕事場に入って遊んだりいたずらしたりする中で、知らず知らずのうちに材料や道具を覚えて、中学生になるとお小遣い稼ぎに手伝いをするようになりました。それが面白くてね」

高校を卒業してすぐ家業に就くつもりでしたが、景気が悪くて仕事が減ったため一旦は会社員となります。



籐は人にやさしい天然素材



堀江正壽さん



籐表工場の労働者 『写真集 波崎町の歴史』(波崎町)より

38歳で退職し、全国の百貨店を回って藤製品の営業をおこなった後、親子で一緒にバッグ、枕、籠、いす、ベッドなどの製品づくりに携わってきました。

「当時は仕事も増えて、毎月10脚くらいいすの注文が入りました。それをひたすら作るうち、応用して他のいすも作れるようになる。教わらなくても自然に身に付く部分もあるんですよ」

職人歴70年を超える正則さんが、7年前に他界。その後は正壽さん一人で製造や修理を請け負っています。

「今まで親父がやっていたことを自分がやるわけですけど、俺にできるかな」と思いながら手を動かしていると、最終的に完成するんですよ。そのとき、ああ、俺は親父から全部教わっていたんだ」と気付く。そんな場面が何度もあります」

一つ一つの工程を「コツコツと」

次に、藤製品ができるまでの工程を教わりました。昔の職人は、藤の原木を割って材料となる皮藤（かわとう）（ピール）を取っていましたが、それができる最後の世代が正則さん

だったそうです。現在は皮藤をマレーシアから輸入し、日本では加工だけをおこなう分業制となりました。

藤バッグの工程は、まず皮藤を一晚煮込んで染色します。次に、皮藤表面のガラス質を薄く削り取って平らにし、それをバッグの型に縦に巻きつけます。そして底の部分から側面、表面へと編み込んでいきます。編み上がった型から外して縁ががりをし、取っ手をついたら完成です。

ラタンファニチャー堀江の人気商品である網代編みのバッグは、正則さんが開発したもの。藤製品の集大成だと正壽さんは胸を張ります。

「いすの座面に使う網代編みをバッグに応用したので、縦と横の目が詰まってとても丈夫なんです。縁ががりも、藤むしろのかがり方と同じ手法です」

バッグを手にとると、まず拍子抜けするほど軽いことに驚きます。美しい編み目や上品な形に目を奪われ、壊れ物を扱うようにしていると、

「こうしても大丈夫ですよ」とバッグをグイッと押したり広げたりする正壽さん。「竹だと割れちゃいますけど、藤はしなやかですから」

現在堀江さんが主に製作しているのは、高齢者やリハビリ用のつかまり立ち器具を年間約200個、枕を年間約150個で、バッグやその他の製品は受注生産のみ。さらにさまざまな製品の修理も大切な仕事です。

藤製品の集大成といわれる網代編みのバッグ



一生ものとして愛用する

丈夫さ、軽さ、美しさ、しなやかさ……、たくさんさんの魅力を兼ね備えた藤製品。自然素材を使って手作りするため、この世に同じものは2つとありません。一生ものとして修理をしながら愛用している人も多くいます。

「修理の品が届いて製法、材料、柄などを見れば、これは親父が作った20年前のバッグだな」とか、祖父の世代が作った70年も80年も前のいすだな」と分かりますよ。修理するために藤をほどくと、当時の技術はこうだったのかと勉強になりますね。それから、うちで作ったベッドは骨材を丁寧曲げて角を丸く作りますが、





素材の皮籐。年々手に入りにくくなっている



編み上がった「型」を外す



SDGsの観点からも注目を集める籐製品



漁業のまちの歴史が籐製品につながっている

他社では骨材を切つてネジ止めし、角が直角なものもあります。そういうものも、ネジが緩まないよう籐で巻いて修理します」。こうして修理をすれば、また20年30年と安心して使えるようになるそうです。

ところで、籐製品を購入したら、日頃どのような手入れをすればいいのでしょうか。質問してみると、その答えは目からうろこの連続でした。「クルミや椿など、植物性の油を布につけて軽くこすってください。でも使っていれば自然に手の脂がつくから、使えば使うほど手入れは不要になるし、長持ちするんですよ。しまい込んでしまうと、^{しゅう}性が抜けるといって、籐の良さが損なわれてしまいます」

「修理で預かった製品の汚れがひどいときは、ホースで水をかけてタワシでゴシゴシすることもあります。皆さんがお使いになって、例えばチョコレートやアイスクリームがついてしまったら、洗濯洗剤をつけて水洗いしてください。大事なものはその後です。日に当たると変形しますから、必ず陰干しでゆっくり乾かします。もし水を吸って膨らんでしまったら、ドライヤーで熱を当てると柔らかくなりますから、形を整えると元どおりになりますよ」

籐製品は、しまい込まずに毎日使う。それが一番のようです。

技と魅力を伝えたい

父から受け継いだ技術を、次の世代へ伝えたい。それが正壽さんの願いです。しかし、伝承は難しくなっていると言います。大きな理由は2つあり、1つは国内の生産量が減っていることです。

「数をこなさないと技術力が上がりません。うちだけでなく、この業界は弟子が技術を磨くための仕事量



使い込むほどに味が出る一生ものの籐バッグ

が減少しているのが実情です」

もう1つは、素材の高騰です。

「マレーシアのジャングルで、伐採した籐を牛に引かせて運ぶのは重労働で、その作業をする人が減っています。また、籐からバイオマスへと移行したので、輸入量が減り、値段はこの20年で約3倍に上がってしまいました」

そういう厳しい状況の中でも、籐製品の良さを見直してほしいという強い気持ちを持ち続けています。

「安価な輸入品もありますが、うちの製品は良い材料を使って手間暇かけて作るから、段違いに長持ちします。ぜひ手にとって、直接見て、普段使いしてください。長年使い込まれた風合いも良いものですよ」

自然の恵みと職人の技が織りなす籐製品。漁業のまちとの関係も分かり、より身近なものになったのではないのでしょうか。

さて、新春を迎え皆さんは、どんな日々を紡ぐ1年にしますか？

息栖にぎわいテラスで展示

市の観光情報や特産品を発信する「コーナー」がみすミュージアムで籐製品を展示しています。ぜひご覧ください。